三宅式記銘力検査

大達清美[1)]　太田喜久夫[2)]

連載目次

1	ウェクスラー成人知能検査(WAIS-Ⅲ)
2	Paced Auditory Serial Addition Task (PASAT)
3	Trail Making Test
4	リバーミード行動記憶検査(RBMT)
5	ウェクスラー記憶検査(WMS-R)
6	三宅式記銘力検査
7	行動性無視検査(Behavioural Inattention Test：BIT)
8	Wisconsin Card Sorting Test (WCST)
9	BADS (The Behavioural Assessment of the Dysexecutive Syndrome)
10	Modified Stroop Test

はじめに

三宅式記銘力検査は，ベッドサイドで短時間かつ簡易に行える言語性記憶検査として，高次機能障害，精神疾患や認知症の評価場面で広く使用されている．標準値や対語の選択などについては課題があるものの，短期記憶障害，対連合記憶や注意障害を鋭敏に反映する検査である．検査方法，結果の解釈などについてまとめた．

検査法の概略

三宅式記銘力検査は，1923年に松沢病院の三宅鉱一と内田勇三郎により発表された[1)]．当時の対語リスト(**表1B**)は現在は使用されておらず，1977年に改変された東大脳研式の対語リスト(表1A)が用いられることが多い[2)]．実際は，施設により異なった対語リストを使用していることもある．一例として平成13年度から開始された高次機能障害モデル事業で使用された対語リスト(表1C)を提示したので参考にしていただきたい．

検査は有関係対語と無関係対語各10組の単語を呈示し想起させる．1回目に全部正しくない場合には同一の課題を3回まで施行し，正しく想起された単語数を数えるものである．言語性短期記憶のみならず，対語の連想から学習に至る過程(プライミング)を反映すると考えられている．特に有関係対語の場合は，これまでに言語的に意味づけされた同義語の対語で構成されており，すでに築かれている神経ネットワークを想起して利用する過程を反映している．これに対し，無関係対語では，課題提示時に対語を関連づけるための新たな言語性情報処理機能を利用する学習過程が関係していると考えられている．

臨床の場面では，頭部外傷など脳損傷をきたす疾患，アルツハイマー病を中心とした認知症，感情鈍麻や興味喪失をきたす各種精神疾患などで用いられることが多い．

施行方法

① **検査の要領説明と理解**：あらかじめ表にない言葉でテストの要領を説明し練習を行う．「これから私が次の言葉をいいますので，よく覚えてください．ビール(約2秒後)コップ，男…女，全部でこのような言葉を10個いいます．次に，私がビールといったらあなたはコップ，男といったら女というように答えてください」

② **本テスト(有関係対語)**：10の対語を1対ずつゆっくりと同じ調子で聞かせ，1対ごと復唱さ

1) 松坂中央総合病院神経内科
2) 同病院リハビリテーション科